

江戸文学と珠算 (3)

鈴木久男

目次

- 一 まえがき
- 二 渡来の前夜（キリシタン文化とそろばん）
- 三 元禄（上方）文化とそろばん（以上前号）
- 四 江戸文化とそろばん(1)
黄表紙
洒落本
- 五 江戸文化とそろばん(2)
滑稽本
狂歌
川柳
以下次号
歌舞伎
その他

四 江戸文化とそろばん

前回までで享保の終り（一七三五年）までを述べたのであるが、今回はこの後、元文から幕末までを述べさせていた

だくことにする。すなわち元文、寛保、延享、寛延、宝曆、明和、安永、天明、寛政、享和、文化、文政、天保……とつづく江戸時代の中期から後期、特に前回は元禄前後（一七〇〇年）を中心に述べた関係から、享保前後（一八〇〇年）に焦点を合わせて記述したい。

江戸時代の前期は主として上方（京坂）を中心にして発達した文化であったが、新開地の江戸でも太平が長くつづいて、名実ともに日本の最大都市となり、政治の中心地であるだけでなく、文化の中心地として栄えて行った。享保時代には町家の人口だけで五十万を越え、武家人口を加えると百万人に達したであろうといわれている。幕府があるだけでなく、参勤交代によって在府中の大名も多かったから地方文化との交流も多くなり、江戸の文化は諸国にまで広く影響を及ぼすようになる、文芸の中心は上方から江戸に移って行く。

上方で発達した浮世草子が衰え、代って江戸で独得の形式、内容を持つ小説が現われる。短編で大人の絵本のような感じの黄表紙きびよしから、長編物語である合巻ごうまきへと進む、滑稽と洒落しやれで筋を通して、世相を誇張したり、時事を茶化したりした。遊里の世界を描写した短編小説、洒落本しやれほん、庶民生活を題材にして諷刺滑稽を主とした滑稽本こっけいほん、歴史物語に取材した長編小説よまほんが発達する。

俳諧から俗化した雑俳ざっぱい、川柳せんりゅうは、散文での黄表紙、洒落本と共通の根底に立つものであった。庶民の声がそこでは率直に表現された。幕臣や江戸に住む武士階級にもあそばされ、やがて学問に興味をもつ町人のあいだに行なわれた狂歌とともにこの時代に黄金時代を築いていったのである。

政治の中心でありながら、経済的にも、文化的にも一歩遅れをとっていた江戸ではあったが、この時代によりやく文化の花が開いていった。

そこでそろばんはどのように江戸市民文化に採り入れられていったのであろうか。

黄表紙

延宝、天和（十七世紀後半）のころ、子どものための絵本として江戸に発生し、表紙の色によって赤本（延享・寛延）、黒本、青本（寛延末以後）、黄表紙、合巻の順序で展開して明治に及んだ大衆的な挿絵文学、通俗娯楽読物を草双紙と呼んでいる。

美濃半紙を二つに切り、二つ折した中型本で、一冊、五枚が定型で、天明のころに全盛したのが黄表紙で、恋川春町の「金々先生栄花夢」（安永四年）が初まりである。朋誠堂喜三二、市場通笑、芝全交、森羅万象、唐来三和、山東京伝などの作者が有名である。

これらの作者が吉田光由の「塵劫記」の題名をもじったり、そろばんを題材にして戯作している。もちろん黄表紙ばかりというわけではないが、ここではそれらの戯作書の目録を掲げてみることにする。

刊年	西暦	書名	作者
享保七	一七二二	手代袖算盤	自笑
元文二	一七三七	合算盤珍口記	浪華甘霜書 西川祐信画
		合算盤智恵鑑①	
延享元	一七四四	役者子住算	
宝曆八	一七五八	追善沈香記②	

安永九 一七八〇

大通人好記

朋誠堂喜三二作③
恋川春町画④

同 同

戲作甚幸記

烏亭馬馬えんば

天明六 一七八六

二一天作二進一十

市場通笑作
勝川春朗画⑤

天明八 一七八八

人間二一天作五
万事

市場通笑作
歌川豊国画

同 一七八八

塵功記二足しょうがつ陸月

群馬亭画⑥

寛政元 一七八九

地獄
飯宅二口ノ勘定縁記

二世喜三二作
勝川蘭徳画

寛政二 一七九〇

女九九乃声

同 一七九〇

算法狂歌大早割

田丸治助

寛政三 一七九一

悪魂
後編人間一生胸算用

山東京伝作⑦
北尾政演画

寛政五 一七九三

鼠子婚礼塵劫記

曲亭馬琴作
歌川豊国画

寛政七 一七九五

善悪邪正大勘定

東来参和著
重政画

寛政九 一七九七

三世相郎満八算

南仙笑楚そま満人

寛政十 一七九八

ちんくわう記

山東京伝作

寛政十二 一八〇〇

人相うらやま裡家算見通座敷
手紋

山東京伝作
北尾重政画

同	同	塵劫記二疋陸月	北尾政美絵⑧
享和二	一八〇二	新板塵劫記	可候作⑨
同	同	手管 早算独稽古	富久亭三笑⑩
同	同	通氣智之銭光記	山東京伝作 歌川豊国画
同	同	狂歌 近道算法早学び大意	
享和三	一八〇三	塵劫記由来 三五十五丁胸中算用噓店卸	時太郎可候作自画
文化元	一八〇四	ちん幸記	
文化六	一八〇九	復讐甚孝記	十返舎一九 北川月曆画
文化七	一八一〇	十露盤於百 掛算之一八継子立身替首頭	山東京山① 勝川春扇画
文化九	一八一二	人孝奇談讚実録	竹塚東子作 菊川英山画
文化十	一八一三	教訓 狂歌尽孝記	入江致身
文化十二	一八一五	むかしむかし 八算見一	市川団十郎作 勝川春亭画
文政四	一八二一	役者甚好記	八文舎自笑 大文舎他笑

同 同 由良湊娘甚孝記

東西菴南北
二世勝川春好画⑩

文政十一 一八二八 継子立浪廻濡衣

二世恋川春町作⑫
春川英笑画

同 同 狂歌塵劫記

鈍々亭
歌川国丸画

文政十三 一八三〇 庭訓塵劫記

華街桜山人
富信画

天保三 一八三二 ○〇宝早割教歌集
塵劫記

辻慶儀

天保四 一八三三 養生めの子算

豊年舍泰平
歌川貞房画

弘化二 一八四五 心学人孝記

得一斎主人

弘化五 一八四八 人間一生入用勘定

日暮佳成

嘉永二 一八四九 算法童子歌

嘉永六 一八五三 算法いろは歌
見一太郎 改算勲功記
八算次郎

年代未評 甚孝記

芸者甚孝記
むすめ塵劫記

烏亭焉馬

以上のごとくである、「塵劫記」は寛永四年（一六二七）出版以来、現存本が四百種以上もある江戸時代の代表的珠算書、数学書である。如何に市民に愛読されていたかが知れる。

山東京伝の「新板手前御存商売物」天明二年（一七八二）に

「くろぼん（黒本）、あかぼん（赤本）は、いかにしても青本にけちをつけんと、ちんこう記（塵劫記）ねんだひき（年代記）どうけ百人一首なぞをかたらひ、柱かくしをねずみ、一まひ多（二枚絵）と青ぼんが中をさけんとはかる。「これちん公（塵劫）や、かんちよう（勘定）のちがわぬよふにたのむよ（赤本）ちん公、あのいちやつきを見やれ、けたひ（けったい）のわるひせんざくだ、（年代記）」のやりとりもある。

喜三二作、喜多川行磨の「文武二道万石通」天明八年には、塵劫記のまま子立に似せて、粹な芸者が三味線を持って円陣をひいている。

黄表紙のはじめといわれる春町の「金々先生栄華夢」にも、

「なんでも江戸へでて、ばんとうかぶとこぎつけ、そろばんの玉はづれをしこため山と出かけておごりをきわめましやう」

がある。京伝の作「心学早染草」寛政二年にも

「今や早や理太郎十六歳となりければ元服をさせけるに、生れつきもよくよい男となり、さて店の商売向あるまま預けてさせければ、型の如く律義者故、朝も早く起き夕も遅く寝ねて、随分万事に心を配り、儉約を元として、親に孝をつくし家来に憐あはれみをかけ、そろばんを常に離さず内外を守りければ、その近辺に評判の息子となりけり。」

がある。市場通笑の「人間二一天作五」天明八年の序文には

「十露盤を枕にして、ばつちりと目の覚るより一日のかけ引、若其桁を置ちがへば、二一てんでん三弦さんせんの、ばちあたりとなりて、氣を八算と思の外、見一無性に樂つきて、終に其身の九々となる。算用しらずの勘定あつて錢足らず、嗚呼、算盤さきの杖が、かんじんなりとしっかりいふ。」

がある。恋川春町の「大通人好記」安永九年や、泰平の「心学人孝記」弘化二年、北齋の「新板塵劫記」享和二年などは著者の手許にあつて、かけ算の九九や、わり声を適当に茶化して誠に巧みな面白いものがあるのだが紙面の関係で割愛する。

洒落本

小本、蒟蒻こんじやく本、通書などと称された。半紙二つ切、二つ折の、四十枚ばかりの短編で、滑稽と通をその信条とした遊里文学である。安永、天明のころに全盛した。寛政二年（一七九〇）松平定信は寛政改革の一端として洒落本禁止令を出したが、京伝はその禁止をおかして発刊したため手鎖くさり五十日の刑に処せられた。その結果洒落本はあとを絶ち、六年ごろからまた刊行されはじめたが往年の全盛をとり戻すことはできなかった。

そろばんに関係あるものに「手管独稽古」富久亭、享和二年（一八〇二）がある。自序に

「算術の徳たるや光由ハ八さん見一の新手を出し、ぼんくらすこたんに是をしめす、今や不佞青樓のいつゞけかゑり、傾城買の早さんを著述ていそなす、蓋娼妓買けだしじようかういかくかくなんの胸算用、虚うそと実まことの極意を悟るハ、いささか開立開平の算術にしててふき客豈此境をしらんや、夜店に並ぶまゝ子だてあれば友呼かぶらは風さんにひとしく、土用とかんの九きう

進が一心迷ふ、なが文に客の心は無勘定、引にひかれぬ義理詰の、とんびハ胸に九々の数、まぶの座舖へ飛桁あれば、きつかけられし舖初ハ是銀遣のはや割の、口舌能床のきぬくに抱れたのハ改算記、苦に成る茶城の掛算にむねを割算かんがへても、がらりとちがふ内の首尾、一角出貫若イ衆の、工面ハ永だい亀井算、一度読で大象の押のおもさを知なへふき、二天作意の引残もおくからん、そこらハナソレ番頭新造の十露盤違ひでおざりいとしか云
于時享和二ツの年 なんでも正月初買の日

於文字樓上 江戸ッ子述

とある。つぎに孫引きで申訳ないが、京伝作のものにつぎの広告文があるという。

〃各々様、益々御機嫌よく御座遊ばされ、恐悦至極に存じ奉り候、随て、私店の儀、御品買の御蔭を以つて、日にまし繁昌仕り候段、冥加に相叶い、有難きしあわせと存じ奉り候。さて是までは、引札お定まりの文言是から貨物の味噌を上げると、欲心の手前勝手と、もみこみの長口上を申上げる場所なれど、それでは御読み遊ばされ候て、御慰みにならずの森の郭公、てっぺんで枕紙か烟管通しとなること目前なり。

そもそも大日本国を去ること十二万三千四百五十六里七町八間九尺にして、算勘国といふ国あり、此の国に金のなる木あり、花は山吹色にしていびつなりの葉を生じ、小玉の如き実をむすぶ、名づけて人好木といい、或いは蛮名をQRBAといふよし、或る蘭学先生のおおせられしなり。拙者この金のなる木の一人人好木と名づくるいわれを知らず。五山加三の名僧たちに問えども法華経八の段にもせず、一三が三部経には勿論なり。コレハ見一むようにせいさつきうには分らぬぞ、鬼一倍一が六韜三の段にも見えざる事なりとのたまう、そこで一心が自身、二いち穿鑿すべしと、一九が九年面壁し、或いは大象のおもさをはかり、或は馬一疋を三人で乗り、継子算の立て方まで、思ひを入

子算となし、鼠算に尻をかぶらるるも知らで工夫すれども、もとが教外別伝、不立文旨な拙者なれば、とっさんかかさん^㉗、せっちんがくさいと、子どもたわごとばかり耳に入り、人好木の謂れはますますわからず、トンとあぐみて、もはやばかしてのけんとしたるところに、ある夜の夢にかたじけなくも大黒天あらわれ給い、善哉善哉、汝人好木のいわれに工夫をこらすこと奇状千万なり、こつては思案にあたわず、それ金のなる木を人好木と名づくるいわれといへば、人好は人の好むとよむ字なり、木は則ち気におなじ、汝人の好む所をよく気どり、風流上品の物を仕入れて商うべし、又蛮名をソロバンという事は、とかく商いは、算盤違いの大安売でなければ繁昌せず、此の二ヶ条をよく守る時は、それが則ち汝の為の金のなる木じゃ、ゆめゆめ疑うことなかれと、神はあがらせ給いけり、なんのいな疑いましょうぞ、早速人好気の上代物を沢山仕入ソロバン違いの大安売——”

をするというのである。倉本長治がいうように、〃その当時としては随分格調の高いものだった。晩年の山東京伝の読者層が、これによって窺われるといつてよからうし、江戸の始めころから行なわれていた数学書であり且つ通俗算数の便覧を兼ねていた「塵劫記」を「人好木」とモジって広告して洒落たところなど、あまり高踏的なので広告効果など殆んど無かつたろうが、当時のインテリを唸らせるに充分な一文であった。〃

のである。江戸の地本問屋鱗形屋平兵衛が、大阪今橋に出した支店に配らせたチラシである。洒落本からチラシにまで脱線してしまったが、ついでに小咄「開卷百笑」寛政十年（一七九八）も紹介しておこう。和泉屋足袋店の主人、和助こと立川談洲楼馬撰である。最後の一章「福鼠」に

〃今は昔、甲子の夜、白鼠一疋来り、見ている内十二疋子を産^{うむ}。その十二疋がまた十二疋づつ産と、だんく産で二三千疋になると出ていって、しばらく過て大きな鼠は大判をくわへて来る。中鼠は小判、小鼠は小粒をくわへてく

る。後には千両筒せんりょうづつを車についで鼠がひいて来るやら、もふ内に置所がないゆへ、居所にこまり二階へ上ると、又二階へもいらぬ程金をはこぶ。戸を明て庇ひさしへ出よふとすると、ひさしへもだん／＼金がつんである。「こいつはたまらぬ」と漸大家根へにげて出、ほっと息をついでいる間に、出る事ならぬよふに金をならべ、下を見れば大勢の鼠が車で金をつんで来る「コレハたまらぬ、ア、宝船／＼」^②

甲子きのえね(大黒様を祭る)の夜、大黒様のお使いの鼠が(福を持ってくるといわれ縁起がよいとされていた)十二匹の子を生み、さらにその鼠が十二疋づつ生んで(塵劫記のねづみ算である)二三千疋となり、大きな鼠は大判を、中鼠は小判を、小鼠は小粒をどこからとなく運んで来る、後には千両箱を車についでひいてくる鼠もあり家の廻りも金銀の大洪水となってしまう。とうとう救け船を呼ばなければならなくなり、店の主人が思わず「これはたまらぬ、ア宝船、宝船」といったという小咄である。

商人といえはそろばん、そろばんは「塵劫記」まことに心憎いまでの記述であった。

注

- ① 序文のみ異なる
- ② 山崎与右衛門、鈴木久男「追善沈香記」「月刊珠算界」一九七二年五、六月号参照
- ③ 喜三二の狂名は手柄岡持
- ④ 恋川春町の狂名は酒上不埒しやうふら
- ⑤ 勝川春朗は葛飾北斎のこと
- ⑥ 群馬亭も葛飾北斎のこと
- ⑦ 山東京伝も北尾政演も同一人物

- 寛政二年出版「早染草」の後編
- ⑧ 北尾政美は歙形蕙齋のこと、国立博物館蔵「近世職人尽絵巻」があり、そろばんが画かれている。
- ⑨ 可候は時太郎可候で葛飾北齋のこと、北齋には「日新除魔の画帳」があり、極月十二日の分に「獅子の算盤を弾く」図がある。
- ⑩ 三笑は式亭三馬の門人で手習師匠
- ⑪ 山東京山は京伝の弟、春扇は三世勝川春好のこと
- ⑫ 二世恋川春町は二世喜多川歌暦のこと
- ⑬ 塵劫記につく代表的な算術書
- ⑭ 倉本長治「異才商人」一七七頁
- ⑮ 塵劫記のわり算の被除数はほとんどが十二万三千四百五十六石七斗八升九合であった
- ⑯ 塵劫記を意識している
- ⑰ 京都、鎌倉の五山とわり声の五三加三とをかけている
- ⑱ わり声に八の段あり
- ⑲ 一三が三（かけ算九九）
いっさん
- ⑳ 見一無頭作九の一というわり声がある
- ㉑ 掃一倍一というわり声がある
- ㉒ 一進か一十、二一天作の五のわり声あり
いっせん
- ㉓ 塵劫記に大象の重さをはかる計算法あり
- ㉔ 塵劫記に「六里ある道を四人して馬三疋て乗あわす」計算法あり
- ㉕ 塵劫記に「まま子立て」がある
- ㉖ 塵劫記に「入子算、ねずみ算」がある
- ㉗ わり声に九三加下三がある

- ㊸ わり声に三進みつしん一十いちじゅうがある
㊹ 内題は無事志有意

五 江戸文化とそろばん

滑稽本

洒落本から出て、小本から中本、さらに長編ものとなり、内容も男女の恋愛痴情を中心に感傷的に描いたものが為永春水に代表される人情本である。洒落本本来の写実的な描法に加えて流行に向かいつつあった落語から学んだ巧妙な会話を駆使して笑いを綴った十返舎一九、式亭三馬に代表される滑稽本が寛政の改革以後にあらわれた。

春水の「いろは文庫」天保十年（一八三九）には「さア誰からでも言わっしゃいと、十六せむ盤取ってはじき懸れば」があり、一九の代表作「東海東海道中膝栗毛」にも、塵劫記やそろばんが登場する。

後編、吉原の駅で

「松ぼらの中ほどに、十四五のまへがみ、どてをくづしてやくわんをかけ、くわしなどならべてあそぶかたてにたび人をよびたづる

「おやすみなさいませ〜

北八「サア弥次さん、くわしでもくわねへか 弥二「チトやすまうト どてのうすべりのうへ〜こしをかけ、ふたりながらくわしをしてやり 北八「小ぞう。このくわしわいくらづつだ 小ぞう「アイ忒文ヅツ 弥二「五ツくつたらいく

らだ 小ぞう「わしはいくらだかしりましない 北八「そんならこうと、五ツで二五の三文か。コレこゝにおくぞ 弥二「ヒヤアこいつはやすいもんだ。もふひとつくをふ、コリヤアいくらだ 小ぞう「ソリヤア三文 北八「ドレ／＼うめ／＼。小ぞう。せんぜにの銭はすんだぞ。あとのくわしが、四つくつたから、三四の七文五分か。エイハ五分はまける／＼ 弥二「イヤ餅もあるな 北八「ドレこつはうめへ、このもちはいくらだよ小ぞう「ソリヤア五文とりよ 北八「五文ツツならこうと、ふたりで六つくつたから。五六十五文。ソレやるぞ 小ぞう「イヤこのしゆは、モウ塵劫記やアうりましない。五文づつ六つくれなさる 北八「ヤア／＼／＼銭があるかしらん 小ぞう「こゝへ出しなさる一ツ二ツ三ツ四ツト五文ツツひとつ／＼にかぞへてめのござんようにひつたくれ 弥二「こいつは大わらひだ 北八「とんだ目にあつたサアいかふ と立あがり四五けんもゆきすぎ

北八「アノ小ぞうは如才のねへやつだ、アノ餅がナニ五文取なものか、二文か三もんの餅だろふに、高くうつてしよてのそんをうめやアがつた「いま／＼しい、今くつた餅がのどにつまつた。ゲツゲツトおかしさ半分、子どもとあなどつて、じきにむくつたと。打わらひたどり行……」

があり、八編の序文には

凡而、ことの十分なるは、欠るの兆、九分なるは、充るの首なれば、八の数を以て、永久の嘉瑞とし、ものゝめでたき極位とする事は、先大江都の八百八町、長にして尽す、神に八百万神永く跡を垂給ひ、法華経八部末世に伝へて弘く、歌書は八代集を最上とし、易に八卦、十露盤に八算、食言に八百の相場あれば、質も八ヶ月を限とす、予が膝栗毛も、此八編に至て足を洗ひ、引込思案の筆をおくこと、花の半開、酒の微酔に託たれど、実の所は遊口上、智恵袋揚底なれば、はたき仕舞し栗毛の趣向、抛なく、おつもりの大坂着、長町泊から滑稽のはじまり／＼

もある。

三馬の「浮世床」文化八年（一八一）初編の下に、つぎの会話がある。

へらず口の丁稚に

短「こいつは終ひに何になるだらう、商人には巻舌でむかず、職人には手ぶつてうなり、ヤイ手習するか」
でっち「何するものか、手習する罪はしねえ」

長「算盤をおくか」

でっち「算盤、へん算盤は二之段ぎりだ」①

びん「べらぼうめ、それは始りだア。夫つ切か」

長「いつから習う」

でっち「今日で五十日ほどになるが、天窓が痛くツてねっから覚えられねえ。おらが所の八兵衛さんはむ闇と、ぶんのめすから、教へるよりも打つ方がたんとだ。二の段ははじまりだといふが、おめへたちはしるめえ、其前に一の段を覚えやアした」

びん「一の段といふがあるもんか、九九だろう」②

でっち「ム、その事よ。おらア二の段でさへ天窓が痛えから、見一まで習はうとしたら、命がたまるめえと思ふからの、一昨日そつと内へ寄つて、かゝさんにはなしたらの、そんなに痛いめをするなら、奉公せずと、内へ逃げて来いと云つたア。算盤で命をとられちやたまらねえから、今度教へようトぬかすと、直さま内へ逃往くつもりだ」③

長「てめへのお袋もべらぼうだナ」

短「世の中にはそんな親が有るから、善人をも悪くする、情ねえ事だス」

でっち「ナアニおらがかゝさんは、能いかゝさんだやつよ。ワイこいつはをかしい、ワイ笑つて遣れエ、いらぬおせゝの權焼やい」トかけ出して行きしが、又たち戻り、

「ヲやおらア肝心の用をきかなんだ、鬢さん洒落ちやアねえ、幾人あるよ」

びん「最うお三人ありますから、すぐに来てお出でなさいト、さうぬかせ」

でっち「ムウぬかす、うぬ又うそをぬかすト、おらが旦那が又こゝとをぬかすぞ、ヤイ爰にゐるやつら、おれがことわるくぬかして見ろ、うぬらは皆天窓をつかめえられているから、骸を動かす事もならねえ、甘茶をなめさせようと、おれさまが、好次第だだ、あやまったか」。

長「やかましい」

でっち「ナニやかましい、口の減らねえ奴等だナ、わいらは終には何になるだろう、商人には巻舌でむかず、職人には手ぶつてう也、ヤイ手習をやるか、算盤をおくか、二の段か九九を覚えたか、べらぼうめ、命が統かすは内へ逃て帰れ、ヤイ覚えてゐろ、留のしらくも天窓の郷在者のへちむくり野郎め、番太の銭を早く帰せ、ピヨイ」トつばきをばきて「ワイ」といひながらにげてゆく。

大変な丁稚である。「早 変胸機関」文化七年（二八一〇）にも

小二変じて主管となる にでっちとかみさまの会話がある。

〃二天作の五 一しんが一しくパチク

あ、あ、あア、なんめう法蓮だぶつ、アゝあきた

「今日は親玉は留守なりと、番頭はゐらず、奇妙々々、イヤまたおらが内のやうな人づかひの悪いうちはねえ。ヤレ寝小便たれるな、十呂盤をさらへ、手習をしろ、口答をするな、アイアイと返事をしると、何でもろくな小言はいはねへ、これでも辛抱したら番頭にするだらうが、虫のいゝ、何その手をくふものか、オヤ／＼また灰ふきがたまつた。……」

もある。前に紹介した馬馬の撰になる「開卷百笑」には「十露盤」と題した本肆楼要賀作の丁稚を主題とした短編もある。

「コレサおのれも十五になるが行燈を見ると眠る丁稚だ、手習をしおれ、そろばんハ三年かゝつて八算をまだおぼへぬたわけづら、サアこゝへ来ておいて見ろ、夫十二万三千四百五十六石七斗八升九合、それからおいて見ろ、なんと申た、べらうぼうめ、二一天作の五、又わすれたか、是よく訳をきゝおれ、二一天作の五とハ上の玉をおろしてそれ此十といふ玉を上玉を五玉といふハ十を二ツにわると五ツになる、これわけがしれたか、玉をみろやい、アイアイではすまぬ、エゝ玉をみやアがれ、なんと忘れた、アイしれました、なんとしれた。ハイ洲走りのへそと」。

できの悪いのも多かったであろう、がしかし、丁稚時代には読み、書き、そろばんを仕事を終えてから、眠い目をこすりながら先輩に教えこまれたのであつた。

喜三二の「古巧木」安永五年（一七七六）序に、

「つく／＼思廻せば、吉原のさがりを初め、呉服物の内証買、友達に借りた金から、六拾両程の払ひ、母を欺し親仁をあやなして拾兩位出ること見えてあれど、残る五拾両が大騒動、此盆前に式拾両出して貰た時さへ、どうやら

七生迄のと出さうな勢、五拾両と言たら勘当の相場が一斗七升五合となる勘定と、流石きずがは米屋の息子程あつて、二心が一心に苦勞するとは、四二天作の穀漬ぐくしなれども、無とうさつ急①な胸算用は、生れついた町人形氣、十露盤の魂の離れぬ所なるべし……”

“……馬術も使者にでも出る時、落ぬように乗て歩行く程なれば済んだものだとは武士の悪悟わるさとりといふものにて、町人の身分で言へば、十露盤も、八算でも覚えればよいと済して居るやうなものぢやと……”

武士の馬術をそろばんの八算に對比して、それだけの知識では悪悟わるさとりといいきっているものであり、喜三二自身もそろばんを理解していたと思われるのである。

狂歌

明和年間、江戸に唐衣橘洲からころもきつしゅう、四方赤良よもあから、朱葉菅江あけらかんこうらが一時の興に狂歌の会を催おしたのが口火となつて、同好者が四方から起り、天明、寛政年間には流行の頂点に達し、天明調狂歌と呼ばれている。そろばんを題材にした名作も登場するが若干の解説を添えて紹介してみよう。

狂歌若葉集 天明三年刊 橘洲ほか

きのさた丸 ⑧ 豊年案山子

豊年てござそろばんのひまもなく

八二かゝしを たてゝこそおけ

(上)

馬蹄 ⑨

発句合に点せよとせちにせめられて

十露盤の 玉をつらねし 句くなれば

我てんさくの こめんあれかし

(上)

北川ト仙ほくせん

寄十露盤立春

よせさんの その口くへ しめかさり

あふて うれしき あら玉のはる

(上)

本 重

商家歳暮

もしほ草 かきたしかきつ 十露盤の

玉の春まつ としの湊は

(上)

もとの木あみ^⑩

寄十露盤恋のたはれ歌の点を乞ればべりて其奥に書付侍る

十露盤の 玉の言葉に わりもなく

かけそこなひし 二二てんさく

(上)

四方赤良^{よものあから}^⑪

十五夜月

江戸文学と珠算

分厘の 雲さへはれて 算盤の

玉の三五の 十五夜の月

(下)

そろばん狂歌中の名作である。

ほんの少しの雲さえも晴れ上って、玉のような、玲瓏とすみ渡つた十五夜の月よ と詠じたものであろう。難題を
といてごめいさんといったときの気持そのままである。

智恵のないし

⑩

三六といへる信濃もの としも十八なりけるが 国へ帰るをよめる

算盤の たま〜おきし 三六か

国へ帰るは、 にくの十八 (下)

そろばんの玉ではないが、たまたま家に召使いとして置いたさぶ六という男が故郷の信濃へ帰ることとなった。な
るほどさぶ六という変つた名だけに、もう年も十八だ。

くに(国)九二に帰る(返る 反対になる)から、にく(二九)の十八だとしたところがまことに細かい技巧といえよう。

藪のうちのつはき

寄十露盤恋

氏なぶて こは十露盤の 玉のこし

終にわりなき をなかとそなる (下)

から衣橘洲⑪

予か酒やめて侍りしとき覆惚に

甘漬アマヅケ 鑊焼カマヤキ 正須マサスネ 餐クラフベ 何ナニ 為ナリ 偏ヒト

止ト 一杯ヒトサカ 寒サムイ 将マシ 市上イチノカミ 三年酒サンネンサケ 不レ 及ニ 胸中ムネノナカ 十露盤ジュロウバン

返し

天作の 御酒やめてより 此おとこ

先十露盤の 玉に疵なし (下)

跋文には

〃四の海静にして 鉤屑ほと浪もたゝねは、八嶋のほかも礎おろして 大船のゆたけき御代に生れあふたのし
さ 棟瓦たかき人々はいふもさらにて 十露盤の玉のかすならぬ身までこの東都にすみとすめる人井を堀すして玉川
のきよきなかれをくみ 田つくらすして万国のたなつもの あくまでくらひはら鼓うちて撃壊のされ歌ちまたにうた
ひ 家くくに和するも 実この道のおもておこすへきときいたれりと 此集撰おはりしよろこひに、れいのこれかれ
茅屋にあつまりて祝のうた あまたよみ侍りし中に

寄酒宴といふことを

酒宴を しつのをたまき くりことも

御代はめてたやく

で終っている。

万載狂歌集 天明三年 四方赤良

たえず涙の あけら菅江④

江戸文学と珠算

そろばんの かけてあはぬも わりなしや

たえず涙の 玉ちかひして (巻第十二)

寄十露盤恋 物事明輔

亀井算 ひく手あまたになりぬれば

身をいくつにやわりてあふへき (巻第十二)

徳和歌後万載集 天明五年 四方赤良

桃 志月庵素庭

そろばんの 位ちかふて 三千年に

なるてふ桃の 三年にさく (第二巻)

小手鞆といへる花をいけし見せにて あきものゝ帳くりかへし算用し侍るとて

腹から秋人^⑮

そろばんの 玉にもかへぬ帳面に

又百かした 小手まりの花 (巻第一巻)

そろばんの玉を弾いて、大切な商売の帳面の算用をしているとつい「また百貸した」などと手まりうたの口調が出てくる。それというのも店先にいけた小手鞆のせいだろうか。

無銭法師^{むせんほうし}

しら露の 玉を今宵の 十露盤に

三五十五の 月とこそおけ(巻第三秋)

(玉、三五十五、おけなどがそろばんの縁語)

はつき廿一日の夜 月をみ侍りて

大事三味

そろばんの そろ／＼かけし 月かけを

みやさん七の 二十一日 (同)

寄十露盤無常 坂上竹藪さかのえのたけやぶ

とりへのゝ 烟とたてし 算用は

涙の玉の をきやまとへる (巻第六哀傷)

予算が狂ってしまったのはそろばんの間違いのためだろうか

寄十露盤恋 医者小路七影いしやのこうじ さじかかげ

よしさらは 命にかけて そろばんの

玉きはるとも あはさらめやは(巻第九恋)

(かけ、そろばん、玉、あふ がそろばんの縁語)

紀 定曆

君をのみ 思ひまいらせ そろばんの

たまさかにあふ 中そわりなき (同)

ただただあなただけを思い慕っておりますものと、手紙に書くほどのなのに、たまにしか逢えない二人の仲は誠にやるせなく、耐えがたいことであることよ。手紙の文言そのままに掛詞としているところがおもしろい。

しょうじょうへんじょう
猩々変生

十露盤の たま／＼よれば はしかれて

あはぬほと猶 思ひかけ算 (同)

たま、はじく、あはぬ、かけ算がそろばんの縁語、たまに立寄っても逢うのを妨げられ一層思いが募るといふ。

狂歌才蔵集(才和歌集) 天明七年 四方赤良

山茶花 夢中榮輔

四五りんは ちりかほこりか 十露盤の

玉のうははに のこるさゞんくわ(巻第六)

寄数子祝 栗くり成笑なりま

十露盤に かゝるめてたき 数々は

ふゆるにしんが 一しなるへし(巻第九)

恋歌

わりくとき かけもとしても 十露盤に

あはぬ恨の つもりもの哉 (巻第十)

蓮葉帯露 腹唐秋人

そろばんの けたかくみゆる はちすはに

今朝はちくとをく露の玉 (巻第三)

寄算盤恋 八橋蜘蛛

そろばんの たまにあふよの わりなきを

にくし 三三か くだかけの声 (巻第十二)

呉服屋夢といふことを 片糸縫女

そろばんの たまにもよふす 波まくら

夢おとろかす はんとの声 (巻第十四)

追善沈香記 宝曆八年

六十六歳でなくなった狂歌師 算盤玉成への追善狂歌集である。

九々に洩てもしらで叶はざる事

「老少不定のことわり たとえ十露盤玉成にても必九々八十一にて終るといふにはあらず此翁已に若かりしより
そろ盤にあたまをわりし何某やの白鼠番頭殿といわれし身のはからずも九々にはづれて六十六にて身まかりし事
い
わゆる十露盤違いにて 閻魔のちやうの申訳なし、しかれども十王の張合九々六十六なるかも知べからず、其故は竹
葉連十五人、真砂連十五人合て三十人図のことくならへて十にあたるを都講とし、又十にあたるを齋長にはぶき、か
くする事あまたたびにして竹葉連皆のき、真砂連も十四人迄のきて 玉成一人白日のもとをのけられて、中の中
の小仏となる事勘定違にて憐むに絶たり」

ではじまる。「塵劫記」の戯作書で、ままたちに似せて竹葉連、真砂連を一人ずつ取除いている。

以下 沈香記を見て算盤玉成翁の行状をしる事 追善句と続いている。

辞世

熟し柿 ころりと落て らくな身を

酒くさしとや 世に思らん

父のおもひ有て無常を歎するの余り、浮世のつとめしきりにすゝみて

たらちねの 別に親をも鼠さん

うます ふえ行 念仏の数 玉成男青我

人々ちんかうきによせて亡父をいたみたまふけるを

大象の おもさは舟につもれとも

はかりしられぬ 亡父の恩 同二男月池

追悼 翁の狂名をおもへは露もめのこに置まさりて

そろ盤の くくの世界を 破算して

一物もなき 玉となられき 閑亭夏風

算盤の玉のいたみの 歌しるし

三斗ごしやうの事に 更合 諸白里人

算盤の 位ちがふて その人の

なき玉もどす 法もあれかし

五明亭季弘

そろばんの玉する露ぞ あわれなる

問に答ふる 言のはもなく

礎音住

算盤の 世になき玉と なられたる

あわれや 数珠の 念仏勘定

正直道成

算盤の 玉ともかはれし ひとけたの

いかて 五輪の 毛弗もなき

野辺亭広道

そろ盤に かからぬ数ぞ あはれなる

百万遍の 数珠の玉成

赤穂花塩

算盤も 又おきかへて 西方の

はちすの上に 露の玉成

松の屋友頼

算盤の よせ違をやしての旅

またあひかたき 玉成の君

蟹木光頼

をしまれて 落すなみだも そろばんの

玉なりながら きへてかひなき

草の屋治頼

千年の 目安に置し 算盤も

おもひのたまに くるそはかなき

松亭素行

算盤の 名のみ残して なき玉の

今や三三の 九品蓮台

そろ盤の つもり違か 玉成の

十万億土 飛げたにして

勘定の あはてかなしや 算盤の

たまでも三一三十一字

算盤は とらしとそ思う 膝の上に

なみたの玉の 置まさるかに

をしめども かひ平そなき 算盤の

玉よばひする 法にはつれて

悲しみの 泪は袖と手拭に

はちはちと置 算盤しぼり

算盤の 玉成 ししの十六を

あとさきにして 六十六翁

おく露の 玉とくだけで 十露盤の

あはぬなげきに 目さへはちはち

千秋庵三陀羅

都亭辰巳

静風亭景吉

酒上眠軽

墨水軒石見

柳々居辰芥

蜀山人

花の屋道頼

(中略)

玉成翁 よに在し程へ交に金を断 土となられてへいたつらに声をのむ ことわりしらぬ涙をさへ とかめあへぬ
ものから 追悼の小冊なりぬる事は 実になげきの中の歎にして 其人のえみのおもて まのあたり見る心ちせられ
て
橋亭 常世国香

思やる わらひ仏に なく涙

落る所は 狂歌なりけり

なくさめよ 死出の道の記 沈香記

ふたつを袖の 玉なりとして

と結んでいる。算盤玉成という狂名もさることながら、掲出した多くのそろばん句に味わいのある句が多い。遊戯文學とはいえ、算盤玉成の狂名から「追善沈香記」の標題を考えつき、塵劫記、特にその八算見一の部分を戯作して集となしたことに意義があり、追善そろばん狂歌集たるにふさわしいものであり、友情の深さも感じうる。

なお当時の狂歌師に算木有政、勘定疎人さんじゆうとんともいた。

注

- ① 一けたのわりざんで、はじめが2でわる方法を学ぶ
- ② 1でわっても答えは同じだから、やらないのである
- ③ 一けたのわり算には2、3、4、5、6、7、8、9でわる八とおりの計算法がある、それが終ってから見一（二けた以上でわる）に入る
- ④ 三年かかってまだ一けたのわり算、しかも二の段とある。これでは困るのである
- ⑤⑥⑦ わり声、二進が一十、四二天作の五、見一無頭作九の一などのものじり

- ⑧ 紀 定丸 宝曆十、天保十二
 四方赤色の甥に当る。幕臣、小普請方からしだいに昇進して御勘定組頭になった人
- ⑨ 飛塵馬蹄 咲山六郎右衛門、唐衣橘洲の友人
- ⑩ 元 木網 享保九、文化八
 渡辺氏、通称大野屋喜三郎 京橋で湯屋業、彼の妻が智恵内子
- ⑪ 四方赤良 寛延二、文政六
 大田 覃通称直次郎、別名南畝、寝惚先生、四方山人、杏花園、蜀山人、山手馬鹿人。牛込の住、御徒士から支配勘定にまで昇進した。狂詩、黄表紙、洒落本もある
- ⑫ 智恵内子 延享二、文化四
 金子通女、元木網の妻、節松嫁々とともに狂歌女流の双壁
- ⑬ 唐衣橘洲 寛保三、享和二
 通称小島源之助、別名酔竹庵、田安家の臣、四谷の住
- ⑭ 朱染管江 元文五、寛政十二
 山崎景貫、通称郷助、別名朱染館、准南堂、漢江とも書く、川柳、洒落本にも活躍した。牛込に住み幕府御先手与力。橘洲、赤良とともに狂歌三大家の一人
- ⑮ 腹唐秋人 宝曆八、文政四
 中井敬義、通称喜右衛門、别号董堂、日本橋本町住の商家の番頭、狂詩集、洒落本の作があり、書家としても名高かった